気づきの向こう側

令和３年　２月１９日（金）
自問清掃通信　　第９号

私が最近目にした生活情報誌のタイトルに、『江戸文化を支えた「もったいない」精神を令和のアレンジで私達が実践』とあり、思わず手に取り読んでみました。その内容を紹介します。

掲載の記事を書いたのは、落語家の林家うん平さん。元料理人という経歴もユニークですが、環境問題を題材にわかりやすい取り組みを紹介されているそうです。

落語にはマクラといって導入部分があり、世間話から入るのですが、そこで私は料理人として食材の話をからめることもあります。食品ロスをなくす話から、環境問題に広げ、近頃は講演会にも呼ばれるようになりました。
（中略）
落語では江戸時代の話をすることが多いため、当時の庶民の暮らしぶりに詳しくなっていきます。江戸時代のことを調べれば調べるほど、リユース・リサイクルという観点で驚くべき実態がわかってきました。
例えば紙。今なら手紙などに文字を書いたとき、途中で間違えたらそのまま捨ててしまうでしょう。ところが江戸時代は紙がすごく貴重なので、紙一枚でも捨てるのはもったいない。書き損じてしまった高価な紙を、自分でリサイクルしていたといいます。墨で書いた紙を家の外に持っていき、太陽の力を借りて乾かします。パリッと乾いたら、次はちり紙として使うことができます。今で言うティッシュペーパーですね。それを鼻でかんだ後、さらにもう一度干して乾かし、今度はお手洗いでお尻のほうに使う。つまり、たった一枚の紙が手紙にならなくてもティッシュペーパーになりトイレットペーパーに変わるのです。
江戸時代には今ではなくなったいろんな職業の人が町に住んでいました。お茶碗が割れたら、それをちゃんと接いでくれる職人さんがいました。町の中で馬が走れば、道端に馬糞を出しますが、それを拾い集める商売があったといいます。馬糞は畑の肥料になり、燃料になるのです。ほかにも、鉄屑を集めたり、木端を拾い集めればお金に変えられるといいます。だから、江戸時代はゴミとして捨てる量が非常に少なかったですし、江戸の町は世界で注目されるくらいきれいで清潔だったということです。
当時の日本は鎖国政策で、今のようにエネルギーや資源を海外から輸入していませんでした。ものが非常に限られている状況。でも貧しかったかというと、当時の人々の工夫により、想像以上に豊かな生活を送っていたことがわかってきました。じゃなければ落語のネタにもなりませんから。今世界で注目されている、日本の「もったいない」精神。これも江戸時代の「ものを大切に使う心根」が受け継がれているためです。「もったいない」というと、「ケチくさい」「貧乏くさい」と考えている人がいますが、私はそうは思いません。ものを大切にする精神は生活を豊かにしてくれるものだということが、江戸時代の人々を見返すとわかってくるのです。
（発行：名鉄コミュニティライフ　生活情報誌「せきれい」より）

「ものを大切にする精神は生活を豊かにしてくれるものだ」という言葉が私は心に残っています。ものを大切に使うこと…。すなわち自分のことだけでなく周りの人も大切にするということ。豊かな生活とは豊かな心であるのではないかと私は考えました。

江戸時代の「ものを大切に使う心根」が、今を生きる私たちに受け継がれているとしたら、黙って掃除に取り組む光景は、きっとこの先も弥北の伝統として、受け継がれていくことでしょう。

（文責　山口　郁子）